

## 2. 日本語にはなぜ挨拶表現が多いのか

キーワード

挨拶表現 敬語 相手との関係性 距離感 領域

海外で、その国の言語で吹き替えた日本のドラマを見たことがある。そのとき、日本語には挨拶表現が多いことを痛感した。その国の言語ではそのような挨拶はほとんど使われていない。「ありがとう」「おはよう」などの挨拶は、多くの言語で同様の挨拶表現を持っているが、日常生活でどの程度使うかは国によって異なり、実際にはあまり使わないという言語もある。日本語では日常でもよく使われるし、それ以外の挨拶表現も多い。「ただいま」「いただきます」「失礼します」「お疲れさま」などの挨拶表現や「お忙しいところ」などの表現は日本語ではよく使われるが、他の言語に翻訳しにくいものである。

また、挨拶をすることは人間関係を維持する際に非常に重要なことと考えられているようである。犯罪に関するニュースで、インタビューされた近所の人が犯人について「あの人は会えばいつも挨拶する人で、そんなことをするとは思わなかった」などと言っているのを聞くことがある。「挨拶をする人は悪い人ではない」という感覚は根強いものがあるようだ。挨拶するかどうかは、その人を判断する際の重要な要素なのである。日本語には挨拶表現が比較的多いということが出来るが、それはなぜだろうか、そしてなぜ重要な意味を持っているのだろうか。一つの考え方を示してみよう。

一つには日本語に敬語があることと関係がある。敬語は「丁寧にするため」と考えられているが、現代社会では実際には、相手との関係性、距離感などについての認識を言語で表したものであるといえる。「先生はいらっしゃいますか」と「いらっしゃる」という尊敬語を使うとき、それは、その動作をする先生を自分より高い位置にあると思っていることを示しているのである。「お忙しいところ、お願いしてすみません」と言うとき、あなたが忙しいことを私は認識している、その忙しいあなたにお願いするということは、それだけ大きな借りを作ることになることを認識している、ということを示しているのである。同じように、会ったときに何か言葉をかけることは、あなたをよく知っている存在として認識していることを示すことになるから必要なのである。一般的に、日本語では、話をするときにはいつも相手を位置づけることが必要になる。たとえば、時間を聞かれて答えるときに、「今3時だよ」と言うか、「3時ですよ」と言うかを選ばなければならない。このように簡単なことを述べる場合に

30 も、相手と自分の関係を考えて表現を選ばなければならないのである。朝会ったとき、相手に対して配慮を示すために「おはよう」と言えば同時に相手への親しみを示すことになるし、「おはようございます」と言えば、相手を自分より高い存在と考  
 えている、あるいはあまり親しくない、距離のある相手、立場の違う人だと考えていることを示しているのである。また、恩恵の認識を示すことも関連するものである。たとえば、友達に対して、「手伝ってくれてありがとう」と言うとき、「ありがとう」で感謝を直接示すほかに、「手伝って」ではなく「手伝ってくれて」と言うことにより、  
 35 その行動が自分にとっての恩恵であるものだと認識していることを表している。相手をどのように捉えているか、そしてそれを言語で表現することは日本語を話すときには、なくてはならないことなのである。これが端的に表れているのが敬語のシステムであろう。

40 もう一つ、大事なことがある。日本語の世界では、それぞれの人が自分の領域を持っている。相手に近づきすぎてはいけない、踏み込みすぎてはいけないという暗黙の了解が強いようだ。二人で話をするときの距離が、日本語を話す人は比較的大きいといわれていることや、日本人は挨拶として握手をしたり抱き合ったりすることが少ないことも関係しているのかもしれない。部屋に入るときにも出るときにも「失礼します」と言うのは、相手の領域に入るとき、出るときに挨拶として必要だからである。  
 45 親しい友達であっても、その人の持ち物を使うとき、たとえば消しゴムを借りるときなどでも必ず「借りるよ」とか、「いい？」など声をかけなければならない。授業中にトイレに行くときに、先生に「トイレに行ってもいいですか」と許可を求めるのは、授業は先生が決定権を持っている場で、教室全体が先生の持っている領域であると認識しているからである。教室を離れることは先生の持っている場を変化させることになると考えるからことわることが必要なのである。同様に、家族や年齢など  
 50 個人的なことを聞くのは失礼になる。また、「コーヒー飲みたいですか」より「コーヒーはいかがですか」のほうが適切な表現であるといわれるのは、何かをしたいかどうかを直接聞くことは踏み込みすぎると考えるからである。相手の持っている領域は侵してはいけないという感覚は日本語の世界においてはかなり強いものであるといえる。

55 相手に声をかけることで相手に配慮していることを示す、相手に踏み込みすぎない、という二つのことを両立させるために挨拶表現がある。決まった挨拶表現を言えば、相手を認め、相手についての認識を示すことになるが、相手の領域には踏み込まなくてもすむ。そのために、日本語には形の決まった挨拶表現が豊富にあり、日常的によく用いられているのである。  
 (坂本 恵)